

## 平和への願いをこめて 原爆法要

57回目の広島、長崎の「原爆忌」を迎え、ニューヨーク本願寺では5日、犠牲者の慰霊式典（「平和の集い」－広島・長崎原爆法要－）が行われ、仏教をはじめとした各宗教者や広島、長崎県人会代表、日本領事館代表ら約60人が参加した。

広島で被爆し、寄進された親鸞聖人像の前で、原爆が投下された午後7時15分（日本時間午前8時15分）に黙想、読経が行われ、日本人ボランティア団体「NY de Volunteer」が、平和への願いをこめて千羽鶴を同聖人像の手にかけた。



式典では、日本領事館の挨拶、仏教、キリスト教、イスラム教など各宗教者による祈念、詩の朗読米同時テロ被害者代表からの挨拶、広島県秋葉忠利市長からの手紙の紹介などが行われた。

顔や手に大やけどを負った原爆被害者である叔父をもつ、広島県人会代表の古本武司さんは「57年前の原爆は経験している人ではないとわからない、恐ろしいことです。最近ではテロや戦争などが起こりうる、危険な時代になってきました。二度と繰り返さないためにも、経験を伝えなければいけないと思います」と語った。

ニューヨーク在住のオノ・ヨーコ氏からの詩の紹介をもって、式典は終了。原爆投下の加害国で行われた法要は、米同時テロ被害者も多く参加し、様々な宗教、人種をもった人々が世界平和を願った。

大橋ゆりこ／ライター